

未熟児顔の選好要因に関する検討

横 田 正 夫¹⁾ 吉 田 宏 之¹⁾
今 関 節 子²⁾ 下 田 あい子³⁾

Determinant of preference for the face of the premature infant

Masao Yokota¹⁾ Hiroyuki Yoshida¹⁾
Setuko Imazeki²⁾ Aiko Shimoda³⁾

要 旨

未熟児顔の選好要因について検討するために9名の新生児（3名の未熟児，6名の成熟児）の顔を写真撮影した。45名の大学生・大学院生がそれらの顔を22相貌的特徴項目，22性格的特徴項目，好きな-嫌いな1項目の計45項目を使用して評価した。因子分析の結果，相貌的特徴では5因子，性格的特徴では3因子が得られた。これら8因子と好きな-嫌いな得点を未熟児と成熟児で比較したところ，鼻因子，理性因子で有意な差が認められ，親密感，積極性の2因子で有意な傾向が認められた。このことは未熟児の顔からは，鼻が低く，理知的でなく，親しみが持たず，活発ではないと印象付けられたことを示唆する。ついで顔の好み（好きな-嫌いな）がどの因子によって決定されるかについて調べるために重回帰分析をおこなった。その結果，好みは主に理性性，形態，親密感によって説明されていた。このことは好まれる顔は，理知的印象を与え，丸い顔であり，親密感ももてる顔であることを示した。

キーワード：未熟児，顔の選好，相貌的特徴，性格的特徴

Abstract

The determinant of preference of premature infant faces was examined. Faces of nine

1) 日本大学文理学部心理学研究室 Department of Psychology, College of Humanities and Sciences, Nihon University

2) 群馬大学医学部保健学科 School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Gunma University

3) 群馬県立小児医療センター Gunma Children's Medical Center

Received February 3, 2000

Accepted February 10, 2000

infants (three premature infants and six mature infants) were photographed as stimuli. Forty-five students rated their faces on 22 scales concerning physical appearance, 22 scales concerning personality, and one scale of likeliness. A five-factor solution in physical appearance and a three-factor solution in personality were obtained via factor analysis. Eight factor scores and likeliness scores were compared between premature and mature infants. As a result of ratings, premature infants had significantly a lower nose and were significantly less intellectual, less intimate, and less active than mature infants. Multiple regression analysis revealed that likeliness was mainly determined by three factors: intellect, form, and intimate. It suggested that when an infant face had an impression of more intellectual, round, and intimate, it would be preferred.

Key words: premature infant, preference of face, physical appearance, personality

I. はじめに

未熟児（低出生体重児）の顔は成熟児に比べ細長顔であることがよく知られている。赤ん坊らしさは顔の丸味によって強調され、一般的に顔は児の発達とともに丸いものから細長なものに変化する¹⁾。未熟児の細長顔は、大人顔の特徴なのである。子どもをもつ親が未熟児の顔を見ても、それをかわいいと感じることが少ない。たとえば、Frodiら²⁾は、親にビデオで未熟児と成熟児を見せたところ、親は前者に対してより生理的に高覚醒状態を示し、よりイライラさせられ、嫌悪するといった否定的反応を示すと報告した。否定的反応は未熟児の独特の泣き声によるばかりでなくその外見に由来するとみなされた。Maierら³⁾は、未熟児の特徴を持つ細長の顔の絵と成熟児の特徴を持つ丸味を帯びた顔の絵を見せられた大学生が、前者の顔に対して否定的反応を生じさせると報告した。こうした否定的反応を引き起こす顔の特徴は、未熟児に身体的虐待が多いとする報告の一部を説明するものと考えられている⁴⁾。

しかし神谷⁵⁾は未熟児をもつある母親が、ふれあい経験を重ねることでいつしか児にかわいさを感じるようになり、かえって成熟児で生まれた子をグロテスクと感ずると言語化したことを報告した。未熟児が成熟児よりもむしろかわいいとする経験は、NICUで日頃から未熟児に接触する機会の多い看護婦からも報告されている⁴⁾。こうした報告は、未熟児との長期接触が、児の顔が喚起する否定的反応を解消させていることを示唆している。

とはいうものの、否定的反応を生起させうる未熟児の顔は、児へ不利な条件を生まれながらに背負わせているかもしれない。神谷⁵⁾の報告している症例では、NICUに入院した児へ母親が触れる部位は、初回面会では手、すねなどが多く、口頬へ触れる行動は2回目以降の面会にならないと現れてこない。Klaus & Kennell⁶⁾は未熟児に面会する許可を得た母親は児と顔を向かい合わせる時間が短い、成熟児の母親は児と顔を向かい合わせる時間が長いことを報告した。こうした児への接触行動ないしは顔を向かい合わせる時間の短さは、母親における未熟児の顔からの回避を示唆している。こうしたことから、児の顔から喚起される否定的反応が、そのどのような要因によって規定されているのかを明らかにすることは、未熟児の母親をケアする上で重要な手がかりを与えると期待される。

顔に対する選好がどのような顔の特徴によって説明されうるかについて検討した横田ら⁷⁾⁸⁾によれば、それが精神分裂病患者の顔であってもアニメーションのキャラクターの顔であっても、ほぼ同様な相貌的特徴ないしは性格的特徴によって説明されていた。顔への選好の原理が児の顔にも当てはまるならば、未熟児の顔への選好判断は、精神分裂病患者やアニメーションのキャラクターと同様な相貌的特徴ないしは性格的特徴によって説明されると期待される。そして、未熟児の面長顔はそうした顔の選好にかかわる相貌的特徴のひとつということになるだろう。

II. 研究方法

被験児

被験児は新生児9名であった。3名は未熟児であり、群馬県小児医療センター未熟児新生児病棟に入院となった児である。1児は33週3日（出生体重1730g）で出生し34週0日の時点で、2児は35週2日（1568g）で出生し36週6日の時点で、3児は34週2日（1230g）で出生し35週7日の時点でそれぞれ顔写真の撮影がおこなわれた。6名は満期産児であり、群馬大学付属病院産科にて出生した児で、入院中に顔写真の撮影がおこなわれた。いずれも写真撮影にあたっては両親の了解を得た。

顔写真の加工

撮影された9名の新生児の顔写真には、身体を支える看護婦の腕等を含めた顔以外が写っている。これらの顔以外の部分を取り除くために、各写真をコンピューターに取り込み、顔を、その輪郭に沿って切り取り、顔部分だけを残し、他は白く加工した。これをプリントアウトし、写真を一枚ずつA4の用紙に貼り付けた。9名の顔写真を3セット用意し、各セットごとに顔写真をランダム順に並べた。3セットのそれぞれを独立したクリアファイルにおさめ、計3冊のファイルを作成した。

顔の特徴の評価

顔の特徴は、相貌的特徴と性格的特徴に分けて評価された。相貌的特徴は22項目（Appendix 1 参照）、性格的特徴は22項目（Appendix 2 参照）からなる。さらに顔への選好を測定するために好きな一嫌いなの項目が用意された。これらの計45項目はいずれも7件法の尺度を構成した。45項目の評定尺度を含んだ評定用紙が用意され、9枚の評定用紙を1セットとした小冊子が作成された。この小冊子を使用して顔の評価がおこなわれた。

ここで使用した相貌的特徴と性格的特徴の項目は、もともと林らによって顔写真⁹⁾ならびにマンガ¹⁰⁾のキャラクターの評価に有効であることが示され、その後横田らによって精神分裂病患者の顔⁸⁾ならびにアニメーション・キャラク

ターの顔⁷⁾の評価に有効であることが示された。

評定者

顔写真の評定者は日本大学文理学部学部生および大学院生45名（平均年齢20.9歳，SD1.7，男性17名，女性28名）であった。

評定手続き

顔写真の評定は個別式におこなわれた。評定者は、個室にてランダム順に並べられた9枚の顔写真を含む3冊のファイルのうちから1冊を与えられる。さらに9枚の評定用紙を1セットとした小冊子が与えられる。評定者は「乳児の顔が提示されます。それぞれの写真から受ける印象について評定して下さい。もっとも当てはまるものに丸をつけて下さい」と教示される。評定者は与えられたファイルのなかの写真を自身のペースにしたがって1枚ずつ評定をおこなった。所要時間は約30分であった。

なお3冊のファイルへの評定者の割り当ては偏らないように配慮した。

統計学的検討のためには統計プログラムSASを使用した。

III. 結果

1. 相貌的特徴の検討

相貌的特徴を検討するために、22項目について因子分析をおこなった。主因子解を求め、抽出された固有値1以上の因子についてバリマックス回転をおこなった。こうして相貌的特徴には5つの因子が抽出され、累積寄与率は71.0%であった。表1は因子負荷量の高かった項目についての因子負荷行列である。

第1因子に因子負荷量の高かった項目は、太った一やせた（因子負荷量0.883）、頬のふっくらした一頬のこけた（0.871）、丸顔の一面長の（0.785）、顔の小さい一顔の大きい（-0.659）、骨の細い一骨の太い（-0.667）の5項目であった。これらの項目はいずれも顔の形態にかかわる項目であることから、この因子を形態因子と命名した。

第2因子に因子負荷量の高かった項目は、目の小さい一目の大きい（0.809）、まつげの短い一

表1. 相貌的特徴のバリマックス回転後の因子負荷行列

項 目	第1因子 形 態	第2因子 目	第3因子 美 醜	第4因子 鼻	第5因子 眉の向き
太った — やせた	0.883	-0.006	0.041	-0.090	0.046
頬のふっくらした — 頬のこけた	0.871	0.002	-0.201	-0.016	-0.119
丸顔の — 面長の	0.785	0.071	-0.192	-0.030	-0.171
顔の小さい — 顔の大きい	-0.659	0.139	-0.153	0.068	0.120
骨の細い — 骨の太い	-0.667	0.180	-0.194	0.188	-0.238
目の小さい — 目の大きい	-0.092	0.809	0.075	0.016	0.107
まつげの短い — まつげの長い	0.180	0.572	0.289	0.175	-0.137
眉の太い — 眉の細い	0.192	-0.617	0.314	0.200	0.265
目のぱっちりした — 伏し目がちの	0.084	-0.769	-0.165	-0.017	-0.082
醜い — 美しい	-0.011	0.117	0.894	-0.193	-0.034
気持ちの良い — 気持ちの悪い	0.050	-0.164	-0.894	0.133	-0.025
鼻の高い — 鼻の低い	-0.192	-0.055	-0.054	0.851	-0.068
鼻すじの通った — 鉤鼻の	-0.068	0.104	-0.245	0.818	0.058
眉の逆八の字形の — 眉の八の字形の	-0.135	0.017	-0.028	-0.014	0.930
固 有 値	3.384	2.472	1.854	1.194	1.029
寄 与 率	0.242	0.177	0.132	0.085	0.074
累積寄与率	0.242	0.419	0.551	0.636	0.710

まつげの長い (0.572), 眉の太い—眉の細い (-0.617), 目のぱっちりした—伏し目がちの (-0.769) の4項目であった。これらの項目は目の周辺の特徴を記述するものであるが, 因子負荷量の絶対値の高いものは正の値, 負の値のものいずれにおいても目に関連したことから目因子と命名した。

第3因子に因子負荷量の高かった項目は, 醜い—美しい (0.894), 気持ちの良い—気持ちの悪い (-0.894) の2項目であった。これらは美醜に関連した因子であるので美醜因子とした。

第4因子に因子負荷量の高かった項目は, 鼻の高い—鼻の低い (0.851), 鼻すじの通った—鉤鼻の (0.818) の2項目であった。これらの項目はいずれも鼻に関連したことからこの因子を鼻因子とした。

第5因子において因子負荷量の高かった項目は1項目, すなわち眉の逆八の字形の—眉の八の字形の (0.930) であったことから, この因子を眉の向き因子とした。

以上のように相貌的特徴については5因子, 形態, 目, 美醜, 鼻, 眉の向きが抽出された。

2. 性格的特徴の検討

相貌的特徴22項目について因子分析をおこなっ

表2. 性格的特徴のバリマックス回転後の因子負荷行列

項 目	第1因子 親 密 感	第2因子 理 知 性	第3因子 積 極 性
親しみやすい—親しみにくい	0.823	0.063	-0.134
善人のような—悪人のような	0.789	0.238	0.037
素直な—いじっぱりな	0.759	0.104	0.087
心の広い—心の狭い	0.704	0.303	-0.092
信頼できる—信頼できない	0.546	0.421	-0.096
さっぱりした—しつこい	0.519	0.435	-0.011
不誠実な—誠実な	-0.557	-0.472	0.103
暗い—明るい	-0.696	0.145	0.308
いじわるな—親切的な	-0.804	-0.232	-0.036
感じの悪い—感じの良い	-0.808	-0.232	0.119
怖い—やさしい	-0.832	-0.194	-0.128
知的な—知的でない	0.245	0.751	-0.058
責任感の強い—無責任な	0.244	0.743	-0.241
我慢強い—あきっぽい	0.030	0.727	-0.161
真面目な—不真面目な	0.275	0.721	-0.009
せっかちな—落ち着いた	-0.194	-0.517	-0.444
消極的な—積極的な	-0.113	0.079	0.824
無気力な—意欲的な	-0.193	-0.126	0.753
意志が強い—意志が弱い	-0.091	0.393	-0.582
自信のある—自信のない	-0.009	0.137	-0.680
固 有 値	7.545	2.486	2.046
寄 与 率	0.377	0.124	0.102
累積寄与率	0.377	0.501	0.603

た。主因子解を求め、固有値1以上の因子についてバリマックス回転をおこなった。抽出された因子は3因子であり、累積寄与率は60.3%であった。表2は因子負荷量の高かった項目についての因子負荷行列である。

第1因子に因子負荷量の高かった項目は、親しみやすい—親しみにくい(因子負荷量0.823)の項目をはじめとした親密感に関連した11項目より成り立っているため、この因子を親密感因子とした。

第2因子に因子負荷量の高かった項目は、知的な—知的でない(0.751)をはじめとした5項目から成り立ち、全体的傾向が理知性に関連すると思われたので理知性因子とした。

第3因子に因子負荷量の高かった項目は、消極的な—積極的な(0.824)をはじめとした4項目で構成され、いずれも積極性に関連していたので積極性因子とした。

以上のように性格的特徴は3因子、親密感、理知性、積極性が抽出された。

表3. 未熟児と成熟児の比較・平均(SD)

項目	未熟児	成熟児	t(df=44)
好きな—嫌いな相貌因子	4.42(0.71)	3.67(0.35)	6.603***
形態	3.40(0.34)	3.42(0.20)	0.177
目	3.82(0.11)	3.83(0.12)	0.311
美醜	3.87(0.08)	3.89(0.07)	0.425
鼻	4.50(0.69)	4.05(0.60)	4.335***
眉の向き	4.25(0.58)	4.36(0.31)	1.502
性格因子			
親密感	4.05(0.03)	4.00(0.01)	1.849#
理知性	3.99(0.25)	3.68(0.16)	3.929***
積極性	4.00(0.09)	3.92(0.05)	1.692#

p<0.1, *** p<0.001 (両側)

3. 未熟児と成熟児の比較

未熟児と成熟児の顔の比較をおこなうために、好きな—嫌いな1項目、相貌的特徴の5因子の得点、性格的特徴の3因子についての得点の平均値を算出した(表3)。8因子の得点については、各因子に含まれる尺度の得点を平均化して使用した。なお、好きな—嫌いな得点は高いほど嫌いな傾向を持つことを意味する。形態は得点が高いほどやせている傾向、目は得点が高いほど目が大きい傾向、美醜は得点が高いほど美しい傾向、鼻は得点が高いほど鼻が低い傾向、眉は得点が高いほど眉が八の字形の傾向を持つことを示している。そして親密感では得点が高いほど親しみにくい傾向、理知性では得点が高いほど知的でない傾向、積極性では得点が高いほど消極的傾向を持つことを示す(得点が高いことは表1、表2に示された各尺度の右側の特徴を強く持つことを意味している。ただし負の符号のものでは逆の特徴を持つ)。

表3に示したように、好きな—嫌いな項目において未熟児と成熟児の平均値の間に有意差が認められた($t(44)=6.603, p<0.001$)。未熟児の平均値は、成熟児より有意に高かった。このことは未熟児の顔が成熟児よりも嫌われたことを意味する。

相貌的特徴についてみると、未熟児と成熟児の間で有意差のみられた因子は鼻のみであった($t(44)=4.335, p<0.001$)。すなわち未熟児の鼻は、成熟児の鼻より有意に低いと判断された。

性格的特徴についてみると、未熟児と成熟児の間で有意差のみられた因子は理知性($t(44)=3.929, p<0.001$)、その傾向を示したのは親密感($t(44)=1.849, p<0.10$)、積極性($t(44)=$

表4. 好きな—嫌いな項目得点を説明する変数の検討(ステップワイズ重回帰分析)

ステップ	取り込まれた変数	Number In	Partial R ²	Model R ²	C(p)	F	Prob>F
1	責任感	1	0.2142	0.2142	110.8550	109.8267	0.0001
2	形態	2	0.0638	0.2779	71.3078	35.5129	0.0001
3	親密感	3	0.0549	0.3328	37.5777	32.9694	0.0001
4	鼻	4	0.0248	0.3576	23.4011	15.4651	0.0001
5	積極性	5	0.0165	0.3741	14.6663	10.5067	0.0013
6	目	6	0.0075	0.3816	11.7625	4.8458	0.0283
7	眉の向き	7	0.0060	0.3877	9.8493	3.8950	0.0491
8	美醜	8	0.0044	0.3920	9.0000	2.8493	0.0922

1.692, $p < 0.10$)であった。すなわち未熟児の顔は成熟児に比べ知的でないといみなされ、親しみがもてず、消極的であるとみなされる傾向を持っていた。

4. 顔への選好を規定する因子の検討

では、児の顔に対する選好を規定する因子は何なのであろうか。このことを検討するために好きな—嫌いな項目を基準変数、相貌的特徴の5因子、性格的特徴の3因子の計8因子を説明変数としてステップワイズ重回帰分析をおこなった(表4)。取り込まれた因子の順番は理知性、形態、親密感、鼻、積極性、目、眉の向き、美醜であった。したがって好きな—嫌いなを規定する因子はここで取り上げられた8因子のすべてということになる。しかし Partial R^2 の値は理知性では大きく、その後形態、親密感の2因子間は近い値であるが、鼻以降の因子では値が小さくなっている。すなわち鼻以降の因子の説明力は弱い。こうしたことから顔の選好に大きく貢献している因子は主に理知性、形態、親密感と判断される。すなわち知的に劣る印象、やせている印象、親しみがもてない印象を受ける顔は、嫌われるということである。

IV. 考 察

相貌的特徴は5因子、性格的特徴は3因子抽出された。相貌的特徴の5因子は形態、目、美醜、鼻、眉の向きであった。形態の因子を構成する項目は、先の研究における精神分裂病患者の顔⁸⁾とアニメーション・キャラクターの顔⁷⁾では2つの因子(形態と体質)に分かれて抽出されていた。目、鼻の2つの因子は先においても同様に抽出されていた。美醜の項目は、その後追加されたものである。先では含まれていなかった項目である。眉の向きは先では緊張因子の1項目として含まれていた。こうしてみると、ここで抽出された5因子は先行研究と大きく矛盾しない。性格的特徴の3因子は親密感、理知性、積極性であった。これらに含まれる項目は、一部の異同はあるものの、先行研究においても同様に抽出されていた。すなわちこれら3因子の再現性は高いことがここでも確認され

た。このように児の顔が、精神分裂病患者、アニメーション・キャラクターの顔の判断と類似の因子によって判断されていることが示された。

好きな—嫌いな項目および上記8因子のなかで、未熟児と成熟児の間に有意な差ならびにその傾向のみられたものは、好きな—嫌いな項目ならびに鼻、理知性、親密感、積極性の4因子であり、それらから未熟児の顔は成熟児の顔より嫌われ、鼻が低く、知的に劣り、親しみがもてない、消極的であると印象づけられていることが示された。こうした特徴は、未熟児の顔からかわいいという気持ちがおきかないなどと報告されている従来¹⁾の所見と一致する。

しかし本研究では面長の特徴は形態因子を構成するひとつの項目であったにもかかわらず、形態因子の得点は未熟児と成熟児の間で有意な差を示さなかった。すなわち従来から面長であることが未熟児の特徴であるとされてきたことがここでは確認できなかった。このことを説明するひとつの理由は、未熟児が3名と少なかったことがあげられよう。さらには顔を撮影する際に、一定の向きで撮影することが困難でわずかに横を向いているものも含まれている。こうしたことから顔の撮影に関し、その方法を工夫する必要がある。

形態因子において未熟児と成熟児に差がみられなかったにしても、上述のごとく、未熟児の顔は成熟児の顔より嫌われていた。そして理知性、親密感、積極性の得点において未熟児と成熟児で差がみられた。このことは、顔の部分の身体的特徴(鼻を除く相貌的特徴)よりは顔全体から受ける印象(性格的特徴)が判断においてより重要であることを示している。さらに顔の選好に関しては、主に理知性、形態、親密感によって説明されていた。この顔の選好には、上述のごとく、未熟児と成熟児の差別化に関与していなかった形態が含まれていた。嫌われる顔の特徴をまとめると知的に劣る印象を与え、やせており、親しみがもてない印象を与えるものであった。いいかえれば未熟児ばかりでなく成熟児においてもそのような特徴を備えていれば好かれない傾向を持つということである。

河野ら¹¹⁾は妊婦の母性不安について因子分析

的検討をおこない、その第1因子に児の異常への不安因子を抽出した。その因子には「知能の劣っている子が生まれるのではないかと心配である」といった項目が含まれている。こうした児の異常への不安因子は、ここでの理知性因子に関連しているように思える。表2に示したように第2因子において知的な一知的でないの項目の因子負荷量は最も高かったのであり、この第2因子が表4に示したように顔の選好を説明する力が最も強かった。すなわち、もともと妊婦には児の異常への不安があり、現実の児に接したとき、その顔から受ける知的に劣る印象によって、その不安が現実のものとなったと感じられ、不安がより強化されてしまうことはあり得ることだろう。こうしたことによって児への好意が妨げられる。しかし、本研究における児の顔の評定者は大学生ならびに大学院生であり、女性ばかりでなく男性も含んでいたことから、

一般的な児の顔への選好要因を示してはいるものの、妊婦、褥婦に想定される上記のような母性不安に影響された児への選好要因は、今後さらに検討を加える必要があるだろう。

本研究から得られる臨床的な示唆は、児の顔への選好要因が主に理知性、形態、親密感であったことから、児の顔から受ける性格的特徴の印象をポジティブに方向付けすることが、相貌的特徴への言及よりも有効かもしれないということである。NICUに入院した児をもつ両親の言語報告は、児との面会前では、生命・発育の不安ならびに現状の不安が高かった¹²⁾。その不安が児との面会において解消される方向での援助は、両親の児への好意的反応を引き出す手助けとなろう。ここにおいて児の顔から受ける性格的特徴をポジティブな方向へ導くことが効果を持つと期待される。

Appendix1. 相貌的特徴の検討のために使用した項目リスト

まつげの短い	—	まつげの長い
醜い	—	美しい
骨の細い	—	骨の太い
眉の逆八の字形の	—	眉の八の字形の
顔の小さい	—	顔の大きい
鼻の高い	—	鼻の低い
血色の悪い	—	血色の良い
下がり目の	—	上がり目の
気持ちの良い	—	気持ちの悪い
眉の太い	—	眉の細い
頬のふっくらした	—	頬のこけた
丸顔の	—	面長の
目の小さい	—	目の大きい
目のぱっちりした	—	伏し目がちの
口の大きい	—	口の小さい
口元の引き締まった	—	口元の緩んだ
額の広い	—	額の狭い
唇の薄い	—	唇の厚い
色の白い	—	色の黒い
髪の毛のかたい	—	髪の毛の柔らかい
鼻すじの通った	—	鉤鼻の
太った	—	やせた

Appendix2. 性格的特徴の検討のために使用された項目リスト

ユーモアのある	—	ユーモアのない
素直な	—	いじっぱりな
感じの悪い	—	感じの良い
信頼できる	—	信頼できない
さっぱりした	—	しつこい
意志が強い	—	意志が弱い
暗い	—	明るい
親しみやすい	—	親しみにくい
知的な	—	知的でない
真面目な	—	不真面目な
責任感の強い	—	無責任な
善人のような	—	悪人のような
無気力な	—	意欲的な
せっかちな	—	落ち着いた
消極的な	—	積極的な
心の広い	—	心の狭い
いじわるな	—	親切な
我慢強い	—	あきっぽい
ひかえめな	—	でしゃばりな
不誠実な	—	誠実な
自信のある	—	自信のない
怖い	—	やさしい

引用文献

1) Zebrowits, L. A.: Reading Faces: Window to the Soul? Westview Press, Colorado, 1997.

2) Frodi, A. M., Lamb, M. E., Leavitt, LA, et al.: Fathers' and mothers' responses to the faces and cries of normal and premature infants. *Developmental Psychology*, 14: 490-498, 1978.

- 3) Maier, R. A., Holmes, D. L., Slaymaker, F. L., et al.: The perceived attractiveness of pre-term infants. *Infant Behavior and Development*, 7: 403-414, 1984.
- 4) Bull, R. & Rumsey, N.: *The Social Psychology of Facial Appearance*. Springer-Verlag, New York, 1988.
- 5) 神谷育司：低出生体重児の母子関係：その問題点と今後の課題について。小児の精神と神経。34:39-48, 1994.
- 6) Klaus, M.H. & Kennell, J. H. (竹内徹, 柏木哲夫, 横尾京子訳)：親と子のきずな。医学書院, 1985.
- 7) 横田正夫：大学生におけるアニメーション・キャラクターの選好要因の検討。日本大学文学部人文研究所研究紀要, 54:125-138, 1997.
- 8) 横田正夫, 清水修, 青木英美, 他：精神分裂病患者の顔から受ける印象の評価。精神医学, 42:37-44, 2000.
- 9) 林文俊, 津村俊充, 大橋正夫：顔写真による相貌特徴と性格特性の関連構造の分析。名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 24:35-42, 1977.
- 10) 林文俊：相貌と性格の仮定された関連性(3)：漫画の登場人物を刺激として。名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 25:41-54, 1978.
- 11) 河野千佳, 横田正夫, 花沢成一：母性不安についての検討。母性衛生, 33:309-316, 1992.
- 12) 横田正夫, 下田あい子, 今関節子：NICUに入院した児の両親の不安と両親への援助。日本新生児看護学会誌, 6:2-8, 1999.

JANN